

# 英語の前置詞 on と「関係の断絶による迷惑」\*

平 沢 慎 也

## 1. はじめに

従来、英語の前置詞 on には「迷惑の on」という用法が存在することが指摘されてきた。これに対し筆者は、英語母語話者が言語使用の現場で参照している知識は（「参照」の意味については注7を、「知識」の意味については注6を確認されたい）、その言語使用が慣習的なものである場合であれ創造的なものである場合であれ、「迷惑の on」よりも具体性の高い知識なのではないか、言い換えれば、「迷惑の on」ほど抽象度の高い知識は発話の現場では参照されていないのではないかと考えている（「具体」「抽象」の意味については3.1節を参照）。本稿はこの仮説を検証するプロセスの途中経過を報告するものである。

本稿の構造は以下の通りである。まず2節で言語使用には慣習的なものと創造的なものがある（その二者が連続的につながっている）ことを確認する。続く3節では言語使用を広く統一的に説明する言語モデル（言語理論）として使用基盤モデル（認知文法）を紹介する。4節で「迷惑の on」についての先行研究を概観した上で、5節では前置詞 on の慣習的使用と創造的使用の実例を観察し、それらの実例を生み出すにあたって英語母語話者はどのような知識を参照したと思われるかを使用基盤モデル（認知文法）の観点から論じる。6節では on に関する本稿の議論をまとめ、今後の展望を示す。

## 2. 言語の慣習性と創造性

およそどんな言語であれ、人間が使っている言語は慣習的な側面と創造的な

側面を併せ持っていると思われる。ここでいう慣習性と創造性は以下の性質を指す。

- (1) [言語の慣習性] 人間は聞き覚えのない新しい表現を作り出してばかりいるわけではない。聞き覚えのある定着した表現（高頻度表現）をそのまま使うことも多い。
- (2) [言語の創造性] 人間は聞き覚えのある定着した表現ばかり使っているわけではない。聞き覚えのない新規表現（低頻度表現）を作り出すことも多い<sup>1)</sup>。

言語の慣習性を示す例としては以下のようなものを挙げるができる。日本語の例 (3) も英語の例 (4) も非常に高頻度で用いられる言い回しであり、母語話者であれば丸ごと記憶して使っているようなものである。

- (3) a. 話せば長くなる  
 b. 逃げも隠れもしない  
 c. 今となっては良い思い出  
 d. VP<sub>1</sub> 暇があったら (ちょっとは VP<sub>2</sub>) (VP は Verb Phrase の略で「動詞句」の意)  
 e. 電話に出る (野中 2020)  
 f. 何の変哲もない (野中 2021)  
 g. 治安が良い  
 h. 閑静な住宅街<sup>2)</sup>  
 i. P 連勝と波に乗る Q (P には数値が, Q にはスポーツの選手またはチームの名前が入る)<sup>3)</sup>
- (4) a. it is worth noting that NP VP (NP は Noun Phrase の略で「名詞句」の意)  
 ここで注意しておかねばならないのは NP VP ということだ  
 b. I [We] regret to inform you that NP VP  
 残念ながらお伝えしなければならないのですが NP VP です

- c. hit NP in the face (野中 2019, 2020)  
NP の顔を殴る
- d. There's a phone call for you  
電話ですよ<sup>4)</sup>
- e. do whatever it takes to VP  
VP ためならなんだってする
- f. somewhere along the way (平沢 2021b)  
(空間的にまたは比喩的に) (長い) 道のりのどこかで
- g. NP VP growing up (平沢・野中 2021: 63)  
子どもの頃に NP VP, まだ大人になっていない頃に NP VP
- h. That's what you get for NP (平沢 2021a: 61)  
NP なんてしてるからそうなるんだ
- i. a good place to start  
良い足がかり, 手始めに良いもの (入門書や, 初心者でも作りやすい料理など)

たとえば日本語の例 (3a) の「話せば長くなる」は、「走っていれば痩せる」や「擦れば白くなる」に共通する「VP<sub>1</sub> ば VP<sub>2</sub>」の一例であるが、日本語母語話者は「話せば長くなる」というフレーズを丸ごと記憶しているだろう。高頻度で耳にする (目にする) 表現だからである。したがって、ある日本語母語話者がこの表現を自分で使用するとき、その話者は発話の現場でわざわざ「VP<sub>1</sub> ば VP<sub>2</sub>」の VP<sub>1</sub> に「話す」を、VP<sub>2</sub> に「長くなる」を入れるという足し算・操作 (言ってみれば「話せば長くなる」の作り直し) を行おうとはせず、記憶している「話せば長くなる」というフレーズをそのまま利用しようとするだろう。このように丸ごと覚えた表現をそのまま使うのが本稿で言うところの慣習的言語使用である。英語の例 (4i) の a good place to start に関しても同様のことが言える。英語母語話者にとってこれは高頻度で出会う表現であるため、丸ごと記憶されていると考えるのが自然である。そのため、ある母語話者が a good place to start という表現を使用するときには、その発話の現場で {a/an} Adj. place to

VP (Adj. は Adjective の略で「形容詞」の意) の Adj. に good を, VP に start を入れるという足し算・操作をするのではなく, 記憶している a good place to start という表現そのものを利用しようとするだろう。

言語の創造性を示す例としては次のようなものを挙げるができる。

(5) あ, 歯磨き粉買ってくるの忘れた。 (筆者自身の自然発話)

(6) I was looking for a **quiet place to die**. (Paul Auster, *The Brooklyn Follies*)

私は静かに死ぬる場所を探し求めていた。

(5) の太字部分は筆者にとって聞く頻度の低い表現であり, 丸ごと記憶しているとは考えにくい。「NP 買ってくる」は慣習的言語使用の例だが, NP に「歯磨き粉」を入れた「歯磨き粉買ってくる」は発話の現場で臨時的に作られた表現であり**創造的言語使用**の例である。英語の例 (6) に関しても同様のことが言える。{a/an} Adj. place to VP は高頻度のパターンだが, Adj. に quiet を, VP に die を入れた a quiet place to die は丸ごと記憶されているフレーズではないため, (6b) の太字部分は**創造的言語使用**の例であると言える。(4i) の a good place to start と比較して理解されたい。

このように, ひとまずは別個に定義した慣習的言語使用と**創造的言語使用**であるが, 本当に明確な境界線を引いて区別することができるものなのだろうか? この区別は, 母語話者がある表現を丸ごと記憶しているかどうかに依存するものであり, 丸ごと記憶しているかどうかは頻度に依存するものであり, そしてその頻度というものは「高い」「低い」の二択ではなく連続的なものであるから, 慣習的言語使用と**創造的言語使用**は連続体をなすと考えるのが自然である。

そうであるならば, 言語学が慣習的言語使用と**創造的言語使用**を説明する際に, まったく別の道具立てに頼るのは好ましくない。以下の節では, 慣習的言語使用と**創造的言語使用**を統一的に説明することができる言語モデルとして, 使用基盤モデルを紹介する。

### 3. 使用基盤モデル

本節では使用基盤モデルという言語モデルを紹介する。言語モデルとは、「言語とはおおよそこのようなもの」という想定・言語観のことだと考えればよい。使用基盤モデルは、言語使用以外の場面で見られる人間の自然な心の働き・認知活動が言語使用の現場でも起こり、その経験が言語知識の基盤をなすと考えるモデルである。したがって、まずは言語使用以外の場面で見られる人間の自然な心の働きについて確認をしておくのがよいだろう。

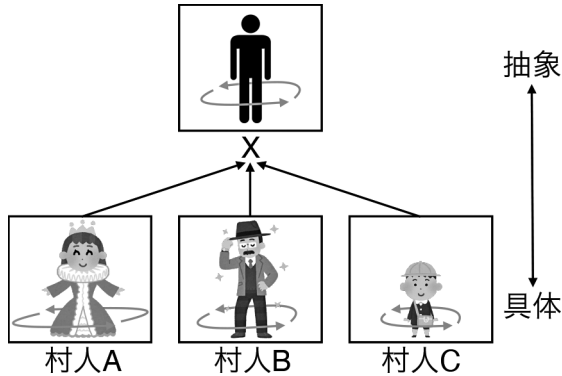
#### 3.1 人間の自然な心の働き

上記の理由により、ここではいったん言語を離れて考えることにする。思考実験として、ある外国の村を訪れて散歩することを想像してほしい。村人たちの見た目や風習などについて一切事前知識を持たず、いきなり飛び込むものとしてしよう。すると、ある村人Aが近づいてきて歓迎の挨拶をしてくれるのだが、なんと村人Aはくるくる回りながら挨拶をするのである。奇妙な挨拶だ、個人の癖か、などと思いながら散歩を続けていると、別の村人Bも、また別の村人Cも、挨拶の際には同様にくるくる回るのである。ここで、この村人は挨拶の際にくるくる回る風習を持つのだということに気がつく。このとき我々は、村人A, B, Cの事例から頭の中で共通性抽出すなわち**抽象化**を行い、この村では村人一般——これをXとする——がくるくる回って挨拶をするのだと理解したことになる。なお、本稿では、共通性抽出の前と後をそれぞれ**具体**と**抽象**と呼ぶことに注意してほしい<sup>5)</sup>。村人A, B, Cに関する知識は具体知識であり、Xについての知識は抽象知識である<sup>6)</sup>。図1のように図示することができる。

この「抽象化」が、言語使用以外の場面で見られる人間の自然な心の働きの1つ目である。

2つ目は、**抽象知識と具体知識の両立**である。村人たちの挨拶の共通性に気が付き抽象化がなされた途端に、その抽象化の元として利用された村人A, B, Cの姿を忘れてしまうということは起こらない。人間の脳はそういう風にはで

図1 抽象化（村人たちの挨拶から）

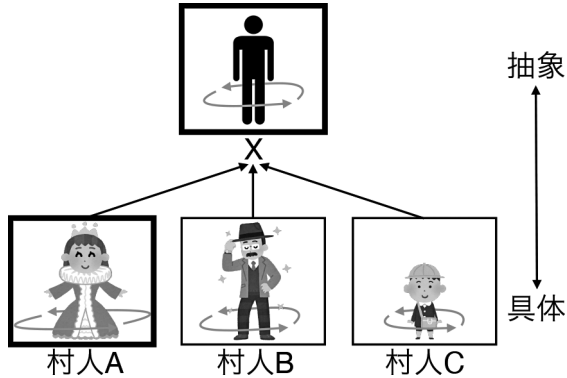


きていないのである。かくして、我々の頭の中は、Xについての抽象知識と村人A、B、Cについての具体知識が両立している状態になる。このように抽象知識と具体知識が両立している状態は人間にとって極めて自然であり普通の状態であると考えられる。

3つ目は**頻度効果**である。ここで言う頻度効果とは、ある具体例に触れる頻度が増すにつれてその具体例についての記憶が強化され、定着していくことを指す。たとえば村人B、Cとは違って村人Aには何度も（たとえば6回）出会い、そのたびに、くるくる回転しながらの挨拶を目撃すると、我々の頭の中では村人Aに関する知識が強化されていく。図2では、村人Aを他の村人よりも太い枠で表示することによって、これを擬似的に表している。なお、Xについての知識も太い枠で表示しているのは、村人Aの挨拶を数多く経験したということはXも数多く経験したことになるからである。

4つ目は**具体知識の優先的参照**である。これは、頭の中に定着している知識のうち具体性の高いものの方が抽象度の高い知識よりも活性化されやすい、という人間の傾向を指す<sup>7)</sup>。たとえば、図2のような知識状態にある我々がまたしても（たとえば7回目）村人Aの挨拶を見たときには、我々の脳はその相手をまさに村人Aとして認識するのであって、Xの一種だと認識するのではない<sup>8)</sup>。これは、Xについての抽象知識よりも村人Aについての具体知識の方が活性化されやすいことの現れである。もちろん、初対面の村人Dに初めて

図2 頻度効果 (村人Aに何度も挨拶された場合)



挨拶される場合には、我々の脳はこの相手をXの一種として認識するだろう。この時点ではまだ村人Dについての知識が頭の中に存在しないのだから、「あ、村人Dだ」とは思いがない。この場合には、活性化しうる知識のうち最も具体性が高いのがXについての知識なのである。

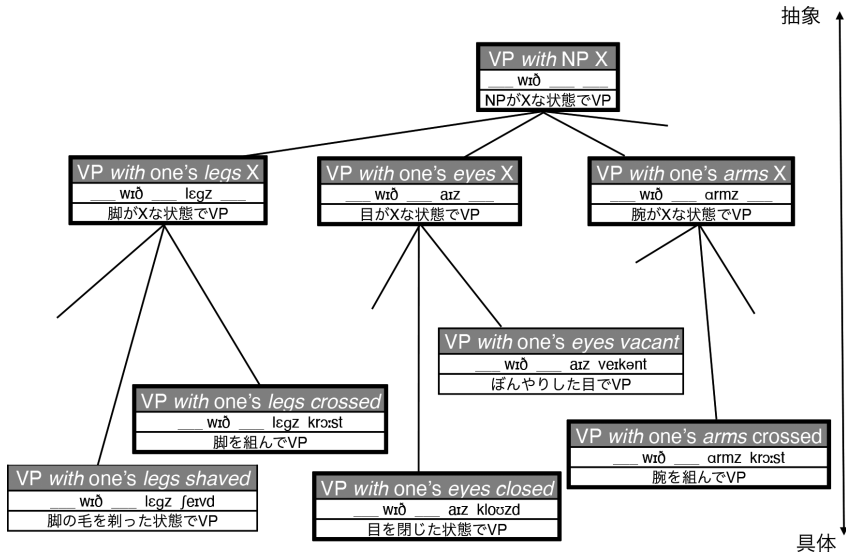
### 3.2 言語の使用基盤モデル

言語の**使用基盤モデル** (usage-based model) (Langacker 1988, 1999) は、Ronald W. Langacker の提唱する言語理論である認知文法 (Langacker 2008<sup>9)</sup>) の根底を貫く言語モデル (言語観) である<sup>10)</sup>。このモデルは、3.1 で確認した4つの (及び本稿で言及していないいくつかの) 自然な心の働きが、言語の習得と使用においても起こると考える。具体的にはどのようなことが起こるのか、前置詞 with の付帯状況用法——[VP with NP X] で「NP が X な状態で VP」の意味を表す用法——を例に取りながら、順に見ていくことにする。

まず、抽象化のプロセスを確認する。英語母語話者が with の実例に触れながら with の付帯状況用法を獲得していくプロセスは、説明の便宜上簡略化して示せば、図3の下から上へと抽象化を進めていくプロセスであると考えられる。

次に、抽象知識と具体知識の両立について確認する。母語話者が、図3で一番下に描かれている (つまり具体性が最も高い) [VP with one's legs shaved] や [VP

図3 頭の中の [VP with NP X]



[*with one's legs crossed*] から、一段上の抽象度を持つ [*VP with one's legs X*] を抽出した途端に、その抽出の元である [*VP with one's legs {shaved|crossed}*] を忘れることはない。人間の脳はそのようにはできていない。したがって、母語話者の頭の中には、[*VP with one's legs X*] という抽象知識と [*VP with one's legs {shaved|crossed}*] という具体知識が共存することになる。同様の理屈で、図3で一番上に描かれている（つまり抽象度が最も高い）[*VP with NP X*] を抽出した後も、その抽出の元である [*VP with one's {legs/eyes/arms} X*] は記憶されたままになっているはずである。かくして、母語話者の頭の中には、図3の最上段、中段、最下段というように様々な抽象度の知識のネットワークが形成されることになる。これが、言語における「抽象知識と具体知識の両立」の意味するところである。

確認する3点目は頻度効果である。[*VP with one's legs shaved*] と異なり [*VP with one's legs crossed*] は非常に頻度が高く、英語母語話者にとって日常生活の中で何度も見聞きする表現であるから、記憶は強化されていくだろう。図3ではこうした高頻度表現を太枠で示している。[*VP with one's legs crossed*] だけでなく



[VP *with one's legs* X] も太枠にしてあるのは, [VP *with one's legs* *crossed*] に何度も出会うということは [VP *with one's legs* X] に何度も出会うということでもあるからである。

最後に, 言語における「具体知識の優先的参照」がどのようなものかを例示する。たとえば『表現のための実践ロイヤル英文法』に掲載されている次の3つの例文について, これらの英文を英語母語話者が話したり書いたりする際に参照されている (with に関する) 知識はどのような知識かを考えてみよう。

### 85C 〈with + 独立分詞構文〉

「Oを～しながら」という付帯状況を表すには, 〈with + O + 分詞〉という形を用いることが多い。

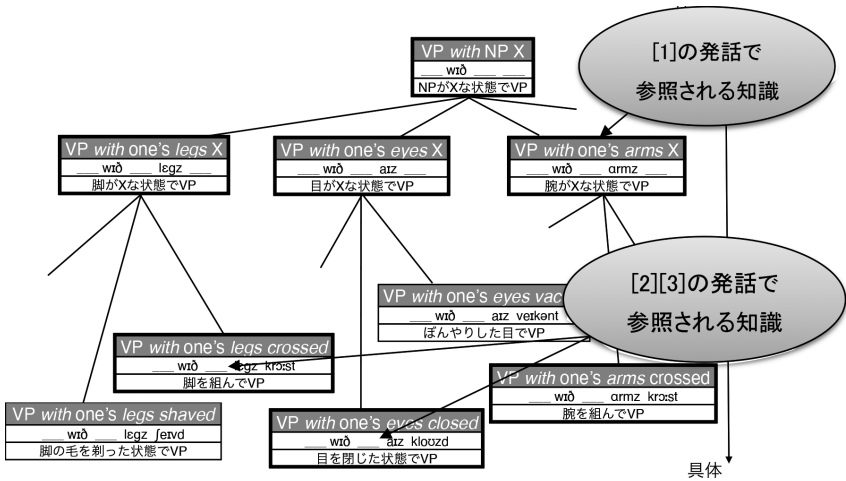
- [1] The drummer used to play **with** his arms **waving** about in the air.  
(そのドラマーはよく両腕を空中に振り回しながら演奏していた)
- [2] You can even tell the difference **with** your eyes **closed**!  
(目を閉じたままで違いを見分けることさえできます)
- [3] The statue of the Amida Buddha is seated **with** his legs **crossed**.  
(阿弥陀仏像は足を組んで座っている)

(綿貫・ピーターセン 2006: 171; 例文番号は平沢が追加)

[1] で用いられている [VP *with one's arms* *waving about*] は高頻度表現ではなく, 創造的言語使用の事例である。[VP *with one's arms* *waving about*] そのものの知識は頭の中にないと考えられる。それでは, この話し手はどのような知識を参照して [1] の英文を産出したのだろうか。記憶されている範囲内で最も具体性の高い知識を参照しているはずだと考えると, [VP *with one's arms* *waving about*] の1つ上の抽象度を持つパターン, たとえば [VP *with one's arms* X] が候補として考えられる。実際, [VP *with one's arms* X] は高頻度の表現であるため, 話者の脳内に記憶されていると考えるのは妥当であろう。以上のことから, [1] の話し手は [VP *with one's arms* X] の知識を参照したのだと考えられる。これに対して [2] の [VP *with one's eyes* *closed*] は高頻度表現であり, 慣習的言語使用の事例である。[VP *with one's eyes* *closed*] 自体の知識が母語話者の頭

の中にあるものと思われる。したがって [2] の英文を産出するにあたって参照された知識は [VP with one's eyes closed] 自体の知識であろう。[3] についても同様で、[VP with one's legs crossed] という高頻度表現それ自体の知識が参照されていると考えるのが妥当である。ここで重要なことは、図 4 に示したように、[1] と [2]・[3] では発話にあたって参照されている知識の抽象度が異なると考えられることである<sup>11)</sup>。

図 4 [VP with NP X] と知識参照



使用基盤モデルに沿った上記の説明では、[1] のように抽象度が高い知識が参照されるメカニズムと、[2]・[3] のように具体性が高い知識が参照されるメカニズムを別立てにする必要がなかった。3.1 で挙げた 4 つの原理で両方ともを説明することができた。このように、創造的言語使用と慣習的言語使用の両方を統一的に説明できるところが使用基盤モデルの強み (の 1 つ) である。

以下、迷惑の on について考えていく上で特に重要な点をまとめておくと (7) と (8) のようになる。

- (7) 慣習的な言語使用においては、聞き覚えのある表現そのものの知識という具体性の高い知識が参照されることによって、その馴染み深い表

現が再生産される。

- (8) 創造的な言語使用においては、慣習的な言語使用の場合に比べて抽象度の高い知識が参照されることによって、聞き覚えのない新しい表現が生み出される。

英語話者が迷惑の on を使用する際に参照している知識を明らかにしようと思う場合には、迷惑の on の慣習的な使用を支えている具体性の高い知識と、創造的な使用を支えている抽象度の高い知識の両方を解明することが必要になる。それでは、先行研究においてそれは十分に達成されているだろうか。

#### 4. 「迷惑の on」の先行研究

##### 4.1 日本語の迷惑受け身との関連

迷惑の on は、正面を切って分析されるよりも、日本語の迷惑受け身との関連で言及されることが多く、(9) のように英語学習参考書でも説明されているほどである。

- (9) 助動詞の「れる」「られる」を使って受身を表す日本語と違って、英語の自動詞は受動態にはならない。日本語なら、たとえば、「行く」→「行かれる」(例：「彼女は恋人に置いて行かれちゃったのよ」) や、「来る」→「来られる」(「お父さんに学校に来られたらいやだ」)、「泣く」→「泣かれる」(「子供たちに泣かれてしまった」) などのように、自動詞は受身の形で大事な役割を果たしているのだが、英語の come, go, cry などは、そもそもこうした受身という便利な形にはならないので、いささか不自由に感じられてもおかしくない。ただ、たとえば「子供たちに泣かれてしまった」のような受動態の場合、前置詞の **on** を使って、“The children cried **on** me.” と言えば、cry が能動態であっても、同じように「～されてしまった」という気持ちを表現することができる。

(綿貫・ピーターセン 2006: 33 ; 強調は原文)

- (10) この例（〔平沢注〕 *We had a gipsy come to the door yesterday*）は、われわれはある出来事を経験した、と述べているだけであり、「ジプシーを訪ねて来られた」のような被害性は含意していないが「…」「経験」と「受動」の概念的な距離はさほど遠くないと考えられるので、文脈や語彙の選択によっては日本語の自動詞受動に近い意味を担うこともある。「被害の on」などと呼ばれる“on him”のような表現を伴う場合には、日本語受動構文との意味的類似性はさらに強くなる。“Ralph had a student go crazy on him”〔…〕などの例は、「学生におかしくなると教師は困惑する」のような被害受け身に通じるものがある。（鷲尾 1997: 99）

こうした文献では、英語の on の迷惑の用法が日本語の迷惑受身の用法と完全に一致するということが積極的に主張されているわけではないだろう。英語の on については、「〔NP<sub>人間</sub>〕が迷惑を受けたことを表す〔VP on NP<sub>人間</sub>〕という表現が存在する」という程度のことしか言われていないと考えるのが妥当であると思われる。図5のような知識の存在が想定されていると考えてもよいだろう。

図5 [VP on NP<sub>人間</sub>] の知識

VP on NP <sub>人間</sub>
— a(:)n —
VPした結果NP <sub>人間</sub> が迷惑を被る

〔NP<sub>人間</sub>〕が迷惑を受けたことを表す〔VP on NP<sub>人間</sub>〕という表現が存在することは間違いないが、〔NP<sub>人間</sub>〕が迷惑を受けたことを表したいときにいつでも〔VP on NP<sub>人間</sub>〕を使うことができるわけではない。たとえば、以下のような使い方は不自然である（「??」は「とても不自然」の意）。

- (11) ?? Don't present your research on me!  
その研究を発表しやがるんじゃないぞ！
- (12) ?? Don't succumb [to this illness] on me now.

(この病気に) 屈するんじゃないぞ。

- (13) ?? She ate a cake **on** him.

彼は彼女にケーキを食べられてしまった。

また、迷惑を表す表現の中には、on 以外の前置詞を含んだ形で定着しているものもある。たとえば、以下に例示する [ruin NP<sub>1</sub> for NP<sub>2</sub>] である。

- (14) a. [状況説明] 話し手とその友人たちはアメリカンフットボールの試合を録画で楽しむため、試合結果が耳に入らないように 1 日工夫して過ごしていた。それなのに、Barney のせいでどちらが勝ったのか分かってしまった。

Now you've ruined the game **for** everyone.

(*How I Met Your Mother*, Season 2, Episode 14)

みんなが楽しみにしてた試合、バーニーのせいでもう台無しだよ。

- b. Leonard: Did you guys see the paper in *the American Physics Journal* on supersolids? It's pretty interesting. This guy's working from a hypothesis where .....<sup>12)</sup>

Raj: Spoiler alert! Spoiler alert!<sup>13)</sup>

Leonard: What?

Raj: Don't ruin it for me, man. I printed out a PDF to read on the potty.

Howard: On the potty? What are you, 5?

(*The Big Bang Theory*, Season 4, Episode 3)

レナード：『アメリカ物理学ジャーナル』に載った超三次体の論文見た？ 結構面白いんだよ。そいつの仮説では…。

ラージ：「ネタバレ注意」だろ！ 「ネタバレ注意」！

レナード：なんだよ。

ラージ：俺の楽しみを奪わないでくれよ。おまるで読もうと思って PDF 印刷してあるんだからさあ。

ハワード： おまるで？ お前 5 歳児かよ。

- c. [状況説明] ロックンローラーの Jesse は自分の曲が日本で大ヒットし、有頂天になっている。しかし妻 Becky に仕事ばかりでなく家族をもっと大事にしてほしいと言われ困惑している。

Becky, I've become a star. Why are you trying to ruin it for me?

(*Full House*, Season 6, Episode 3)

ベッキー、俺はついにスターになったんだよ。それをどうして台無しにしようとするんだよ。

- d. [状況説明] 修学旅行から帰ってきた語り手 August が、旅行中にトラブルに巻き込まれたことについて語っている。

I mean, it was just awesome. That's why I'm so bummed. I feel like they ruined the whole trip for me.

(R. J. Palacio, *Wonder*)

ただただ楽しかったんだよ。だからこんながっかりしてるんだ。旅行丸ごと台無しにされたような気分。

こうした事実を踏まえると、迷惑は迷惑でもどのような迷惑なら *on* が使えるのか、どのような動詞を選べば迷惑の *on* が使えるのかといったことを探求する必要があると言える。「[NP<sub>人</sub>] が迷惑を受けたことを表す [VP *on* NP<sub>人</sub>] という表現」(図5) では知識の単位として抽象度が高すぎるのである。もっと具体的に考えなければいけない<sup>14)</sup>。

## 4.2 小西 (1976)

小西 (1976) はこれに比べ具体的で、迷惑の *on* を以下の9つのタイプに分類している。

- (i) The joke is *on* A 〈人〉 / play a joke *on* A 〈人〉 の型
- (ii) The drinks are *on* A 〈人〉 の型
- (iii) He is hard *on* A 〈人〉 の型
- (iv) He goes legal *on* A 〈人〉 の型

- (v) He has something *on* A 〈人〉の型
- (vi) He walked out *on* A 〈人〉の型
- (vii) He died *on* me の型
- (viii) put the police *on* A 〈人〉の型
- (ix) その他

そして、このそれぞれの「型」の例文が数多く挙げられている。

小西 (1976) のアプローチの問題点は大きく分けて2つある。まず、(i)-(ix) のそれぞれの「型」にどのようなものが含まれ、どのようなものが含まれないかの基準を必ずしも明示していない。たとえば、(iv) 「He goes legal *on* A 〈人〉の型」の項を見てみると、「go=become, get で (cf. go mad) 「A に法律を振り回す」 ぐらいの意」とした上で実例を2つ挙げているが、その実例のうち1つは go conservative *on* me 「私に保守的なことを言う」を含むものになっているのである。保守的なことと言う行為は法律を振り回す行為と完全に同一というわけでないのは言うまでもなく、説明を加えられないと類似性すら感じ取れないという人も多いだろう。したがって、「「A に法律を振り回す」 ぐらいの意」という言葉遣いは、小西自身がこの項目に含めたい用法を適切に一般化したものになっておらず、読者から見るとどのような事例がこの (iv) のグループに入り、どのような事例が入らない (と主張されている) のかが判定できないのである。また、(vii) 「He died *on* me の型」では、「日本語の「死なれる」「先立たれる」といった受身表現に相当する言い方」と説明しつつ、「次のような表現もここに分類できよう」と述べ、the sheds burned up *on* him 「小屋が灰になって彼は文無しになってしまった」や、懐中電燈の光が消えることを表現した go out *on* me などの例を挙げている。小屋や光といった無生物の例と人間の例 (e.g. He died *on* me) の間の関係は、(iv) で見た「保守的な発言をすること」と「法律を振り回すこと」に比べればはるかに捉えやすいけれども、小西自身が分類の基準を明示的に言語化していない以上、読者としては自分の理解が小西の意図した通りの理解であると確信することはできない。さらには、(ix) 「その他」が存在することによって、結局のところ、迷惑を表すならばいつでも

on を使うことができるのではないかと思わせる記述になってしまっている。

もう1つ問題となるのは、「型」ごとに挙げられている事例を生み出すにあたって当該の話し手・書き手がどのような抽象度の知識を参照した（と小西が考えている）のかが明示されていないことである。これにより、挙げられている事例は基本的にすべて当該の「型」通りの抽象度の知識を参照して産出された（と小西が考えている）ように読めてしまう。たとえば、(vi) 「He walked out on A 〈人〉の型」に含まれる例として (15) と (16) が挙げられている。

- (15) He handed the driver a ten-dollar bill, said. “This will be a guarantee that I’m not *walking out on you*.”

彼はタクシーの運転手に10ドル札を渡して言った。「これは君を待たせておいたまま（金も払わないで）ドロクしない保証だよ」

(小西 1976: 174; 強調は小西)

- (16) I’m very sorry, sir. . .” he said, and *beat it on me*.

「申し訳ありませんが…」と彼は言ってあたふた出ていった

(*ibid.*)

この2つの例で書き手が参照した知識の抽象度はおそらく異なり（詳しくは5節を参照）、(15) では [*walk out on* NP<sub>人間</sub>] という具体的な表現そのものの知識が、(16) では [VP<sub>去る</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] というもっと抽象度の高い知識が参照されている。こうした参照知識の抽象度に関する情報を記述の中に含めることによって、小西 (1976) の姿勢を、より英語母語話者の言語活動の実態に密着したものにすることができる。

以上、小西 (1976) の抱える問題点を2つに分けて論じてきたが、本稿独自の分析に入る前に、小西 (1976) の「分類」という姿勢それ自体は批判されるべきではないということを指摘しておきたい。たしかに、現代の言語研究では記述的な研究が「ただ分類しただけで、面白みに欠ける」として非難されることがよくあり、小西 (1976) もそのような目で見られることがあるかもしれない。しかし、使用基盤モデルの想定が正しいならば、母語話者が発話の現場で



参照する知識は、多くの場合、かなりの程度具体的なのである。具体的な知識というのは、たとえば図4のように図示した場合に、大きな幹から枝分かれした小枝の先にある知識のことである。つまり分類された知識である。小西は「He walked out on A〈人〉の型」のように分類を示し、その「型」に含まれる例文を通じて〔walk out on NP<sub>人</sub>〕などの高頻度表現をカバーしている。1つ前の段落で筆者は「こうした参照知識の抽象度に関する情報を記述の中にも含むことによって、小西(1976)の姿勢を、より英語母語話者の言語活動の実態に密着したものにすることができる」と述べたが、逆に言えば、この程度の微修正を施すだけで英語母語話者の言語活動の実態に密着できるほどに、小西(1976)は使用基盤のだったのである。言わば、話者の参照知識について語り出す準備は整っていたのだ。こうしたことを無視して、「分類=つまらない」という等式を当てはめて小西の研究を批判・無視することはあってはならない。むしろここには、後世に残された英語研究者が積極的に引き継ぐべき仕事の存在が見て取られるべきであろう。

本節の内容をまとめると、我々がすべき仕事は、複数の小さなグループを作り(ほどほどの抽象度のパターンの存在を想定し)、その中に複数の高頻度表現の存在を認めるという小西(1976)の姿勢を踏襲しつつ、そのグループ化の根拠・基準をよりはっきりと言語化すること、グループ内に含まれている実例を産出するにあたって英語母語話者が参照した知識がどのような抽象度の知識なのかを明示することである。そうすれば、迷惑の on の慣習的な使用も創造的な使用も適切な形で捉えることができる記述になる。本稿が以下で目指していきたいのは——もっと言えば、本稿によって第一歩を踏み出した「迷惑の on」の解体プロジェクトが目指していきたいのは——このような方向性である。

## 5. 「迷惑の on」の慣習的使用と創造的使用

本節では、上記のような形で小西(1976)を発展させる道筋の一例を具体的に示したい。5.1節では迷惑の on を含んだ(ある特定の種類の)高頻度表現を含んだ実例を見る。それらを産出するにあたって英語母語話者が参照した知識

は、表現それ自体の知識という具体的な知識であることを確認する。5.2 節では、迷惑の *on* を含んだ（ある特定の種類の）低頻度表現を含んだ実例を見る。それらを産出するにあたって母語話者が参照した知識は、5.1 節で見た高頻度表現それ自体よりは抽象的でありつつも、[VP *on* NP<sub>人間</sub>] まではいかない、ほどほどの抽象度をもった知識であることを論じる。このような道筋で、迷惑の *on* のある種のものについて、慣習的な使用と創造的な使用の両方に説明を与える。

### 5.1 高頻度表現に見る迷惑の *on* の慣習的な使用

本節では迷惑の *on* の慣習的な使用を観察する。以下の□で示した表現は高頻度表現であり、各実例の下線部を発するにあたって英語母語話者が参照した知識は、□で示した表現それ自体の知識であると考えられる。

#### □ [walk out on NP<sub>人間</sub>]

家族または家族に見立てることができるような緊密な人間関係（恋人、大親友、長年の仕事のパートナーなどとの関係）から抜けることによって、残された [NP<sub>人間</sub>] を（精神的に、金銭的に、etc.）困らせるということを表す。

- (17) According to his mother, his father was a monster of selfishness who had walked out on her for a “slut” and had never wanted anything to do with his son.

(Paul Auster, *The Red Notebook*)

母親の話では、父親は自己中の塊のようなクズ男で、「あばずれ女」のために自分をおいて去り、息子とは全く関わりたがらないような人だとのことだった。

- (18) [状況説明] 出版社の社長 Greenleaf のお抱え売れっ子小説家 Alan が何者かに殺害された。以下は Alan の生前の様子について Alan をよく知る人物が説明している場面。

Alan was about to walk out on him [=Greenleaf], taking a best-selling book with him.

(*Columbo*, Episode 22)

アランはグリーンリーフとの契約を切って、ベストセラー確実の作品を別の出版社に持っていかうとしていたんです。

□ [*disappear on* NP<sub>人間</sub>]

姿をくらますことによって [NP<sub>人間</sub>] を悲しませる、困らせることを表す。

- (19) [状況説明] 語り手と妹 Prim の母親は育児放棄をして失踪していたが、あるとき戻ってきた。このことに語り手と Prim は異なる反応を示す。

Prim was thrilled to have her back, but I kept watching, waiting for her to disappear on us again. I didn't trust her. (Suzanne Collins, *The Hunger Games*)

プリムは母親が戻ってきて喜んでいたが、私はまた裏切っ出ていってしまうのではないかと注視を続けた。母を信用していなかったのだ。

- (20) [状況説明] Thornhill に暮らす Cheryl はレズビアンで、Toni と交際しているが、喧嘩別れをしそうになっていた。以下は仲直りをする場面。なお、Cheryl は J.J. という双子のきょうだいを父親に殺された過去を持つ。

Cheryl: Thornhill was a den of shadows. And J.J. was my only light. Then ...he died. And it was dark again. Until you. And then it felt like you were disappearing on me.

Toni: But I'm not gone. I'm right here. And maybe...it's not too late for us. (Riverdale, Season 3, Episode 16)

シェリル： ソーンヒルは影の巣窟だった<sup>15)</sup>。J.J は私にとって唯一の光だった。はずなのに…死んじゃった。また暗闇に戻った。トニが現れるまでは。そしたら今度は、トニまで私のもとから消えていこうとしてる気がしてきちゃったの。

トニ： 私は消えてなんかない。ちゃんとここにいる。思うんだけど…私たちまだやり直せるんじゃないかな。

□ [*quit on* NP<sub>人間</sub>]

職場やチーム、組織といったものから抜けることによって、助け・協力を必要

としている [NP<sub>人間</sub>] を困らせるということを表す。

- (21) [状況説明] 話し手は、かつて一緒に仕事をしていた Kay に声をかけ、再び手を組んだ矢先にトラブルにあってしまった。

You can't quit on me now, Kay. (映画 *Men in Black II*)

いま辞めるのはなしだぞ、ケイ。

- (22) [状況説明] アメフトチーム Bulldogs のキャプテンに選ばれたのに辞退しようとしている Archie Andrews と、そのことに驚いている Clayton コーチの会話：

Clayton: What, are you quitting on me, Andrews?

Archie: No. And I really hope you don't cut me, coach, because I freaking love being a Bulldog. (*Riverdale*, Season 1, Episode 5)

クレイトン：おいおい、まさかチームを辞めるつもりじゃないだろうな、アンドリュース。

アーチャー：いえ。むしろ辞めさせないでほしいです、コーチ。だって俺、ブルドッグでプレーするのがホント楽しいと思ってますから。

#### □ [*bail on* NP<sub>人間</sub>]

一緒に何かをするという約束・取り決めがあったのにそれを破り、[NP<sub>人間</sub>] を困らせる、の意味。

- (23) [状況説明] Robin は、Ted の「連れ」(plus-one) としてある結婚式に参加する予定だったが、大きな仕事のチャンスが舞い込んできたためドタキャンすることになってしまった。以下は、その仕事を終えた Robin が、親友の Lily に仕事の成功を報告した直後の場面。

Lily: Congrats! That's so cool.

Robin: Yeah, I felt really bad bailing on Ted, though.

(*How I Met Your Mother*, Season 1, Episode 13)

リリー：おめでとう！ よかったじゃん！

ロビン：でもドタキャンしちゃってテッドには悪いことしたなあ

と  
思  
っ  
て。

- (24) [状況説明] 男子高校生 Archie はある時まで作曲のために音楽教師 Grundy に個人レッスンを受けていたが、音楽的援助を断ち切れ、作曲が進まなくなっている。以下は、友人 Cheryl からこのことを聞いた Josie が、Archie に言うセリフ。

She [= Cheryl] said that you needed help with your music since Ms. Grundy bailed on you.

(Riverdale, Season 1, Episode 3)

シェリルから聞いたんだけど、あんた、グランディー先生に突き放されて、困ってるんだって？

□ [cancel on NP<sub>人</sub>]

一緒に何かをしようと約束して予定も立てたのにそれをキャンセルして、[NP<sub>人</sub>] を困らせるということを表す。一緒にすることになっていた「何か」は一時的・短期的なものであることがほとんどである。

- (25) [状況説明] 女性が息子（高校生）の同級生 Paxton がマツチヨになったのを見て喜んでいる。

Paxton! Oh, my goodness! All of that swimming has given you some muscles. If your prom date cancels on you, you know where to find me.

(Never Have I Ever, Season 1, Episode 3)

パクストン！ あらあら！ スイミング頑張ってるからかしら、ちょっと筋肉ついたんじゃない？ プロムの相手がキャンセルになっちゃったら、私に声かけてよね。

- (26) ‘You know how I told you Cosmo cancelled a date on me recently? He was picking out a ring with his mother,’ Amanda said.

(Susin Nielsen, My Messed-up Life)

「最近コズモにデートをドタキャンされたって話したでしょう？ あのと、お母さんと一緒に指輪を選んでくれていたんだって」とアマンドは言った。

□ [*hang up on* NP<sub>人間</sub>]

電話を途中で切ることによって、まだ話すつもりでいた [NP<sub>人間</sub>] を不快な気持ちにさせたり困らせたりすることを表す。

- (27) Darrin? Da ... he hung up on me. (*Bewitched*, Season 1, Episode 34)  
ダーリン? ダ…切られたわ。

- (28) I hear a click and realize my drunk ex-husband just hung up on me, beating me to it by seconds. (Emily Giffin, *Baby Proof*)  
カチャッという音がして、酔っばらいの元夫に電話を切られたことに気づく。数秒先を越されてしまった。

□ [~~*close / shut*~~ *the door on* NP<sub>人間</sub>]

物理的 (or 比喩的) にドアを閉めることにより [NP<sub>人間</sub>] との会話や交流を切り、[NP<sub>人間</sub>] を不快な気持ちにさせたり困らせたりすることを表す。面白いことに逆の *open the door on* NP<sub>人間</sub> は極めて低頻度。

- (29) “I want you, Phyll,” he says.  
“I’m about to get my period,” she says, and walks into the bathroom and closes the door.

He wants to say [...] I want to make *love* to you, Phyll, why are you closing the door on me? (Ed McBain, “Where or When”)

「君が欲しいんだ、フィル」と彼は言う。

「もうすぐあの日だから。」フィルはそう言ってバスルームに入り、ドアを閉める。

彼は「君と愛しあいたいんだよ、フィル、それなのにどうしてドアを閉めるんだ」と言いたい気持ちに駆られる。

- (30) [状況説明] Buck は、浮気相手の家に着くとすぐに、「Eleanor (Buck の妻) が来ることになっているから帰って」と言われる。

He stalked sulkily back toward his car and heard her shut the door on him. Without even saying goodnight! (Nicholas Evans, *The Loop*)

バックがふくれっ面で車に戻ると、エレノアがドアをバンと閉める音

が聞こえた。まったく、おやすみの一言もなしとは！

ここで挙げた表現は全て高頻度表現であるから、母語話者が丸ごと覚えて使っているものと考えるのが妥当である。たとえば Cosmo cancelled a date on me recently と発話する話者が参照している知識は [cancel on NP<sub>人間</sub>] というフレーズの知識であり、それ以上抽象的な知識ではないだろう。それでは、低頻度表現が用いられる創造的言語使用の現場で参照される知識はどうだろうか。

## 5.2 低頻度表現に見る迷惑の on の創造的な使用

本節では迷惑の on の創造的な使用について見る。以下の (31)–(35) はその例 (実例) であるが、どのような知識を参照して産出されたものだろうか。

▷ [beat it on NP<sub>人間</sub>]

- (31) “I’m very sorry, sir. . .” he said, and beat it on me. I didn’t hold it against him, though. (J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)

「本当に申し訳ないんですが……」とウェイターは言って、そのまま行ってしまった。でもそいつに対して腹を立てたとか、そういうんでもない。 (村上春樹 (訳) 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』)

この例は小西 (1976) があげている例 (16) と同じものであるが、ここでは小西よりも長く引用し、かつ村上春樹訳を示してある。さて、[beat it on NP<sub>人間</sub>] 自体は頻度の低い表現であるため、[beat it on NP<sub>人間</sub>] という知識が話者の脳内にあるとは考えにくい。それでは、この書き手はどのような知識を参照してこの英文を書いたのか。

ここで思い出されたいのは、5.1 節で見たように、[walk out on NP<sub>人間</sub>] や [disappear on NP<sub>人間</sub>]、[quit on NP<sub>人間</sub>] といった表現の知識はおそらく話者の脳内にあるということである。この3つの表現は人が人をおいて去ることによる迷惑を表すという明確な類似性を持つ。ここにはさらに [bail on NP<sub>人間</sub>] 「一緒に何かをするという約束を破り NP<sub>人間</sub>を困らせる」も加えることができるかも

しれない。というのも、「一緒に何かをするという約束を破り NP<sub>人間</sub>を困らせる」とはすなわち「共有するはずだった行為の場を出ていき、NP<sub>人間</sub>をおいて去ることによって、NP<sub>人間</sub>を困らせる」ことであると捉えることも可能であり、かつ、動詞 *bail* には (32) のように物理的・空間的な移動の意味合いが強い用法も存在するからである。

(32) [状況説明] Cassie は嫌なことばかり続いた愚痴を Ted にえんえん話している。以下は Ted の心内発話。

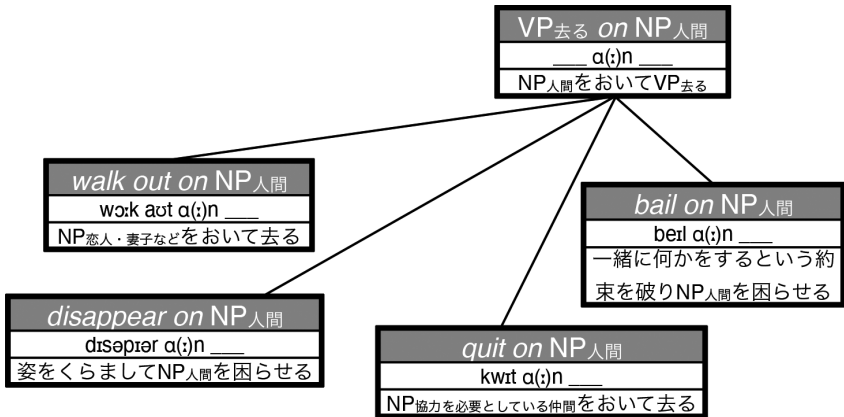
Okay, I'll get one more drink with Cassie, then **bail**. But where? Bar or dining room?

(How I Met Your Mother, Season 9, Episode 6)

よし、キャシーともう一杯だけ飲んだら逃げよう。でもどこに？ バーか、それともダイニングか。

したがって、[*walk out on* NP<sub>人間</sub>], [*disappear on* NP<sub>人間</sub>], [*quit on* NP<sub>人間</sub>], [*bail on* NP<sub>人間</sub>] といったパターンから、話者の脳内で [VP<sub>去る on</sub> NP<sub>人間</sub>] という (ほどほどの) 抽象化がなされている可能性がある (図 6)。

図 6 ありうる抽象化① [VP<sub>去る on</sub> NP<sub>人間</sub>]

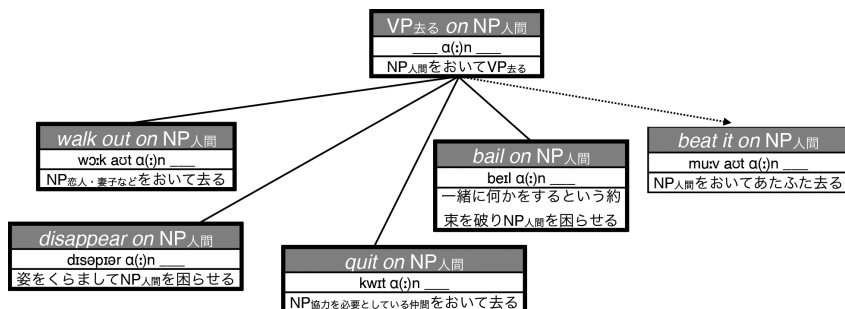


となると、(31) の [*beat it on* NP<sub>人間</sub>] は [VP<sub>去る on</sub> NP<sub>人間</sub>] という知識を参照したうえで、この [VP<sub>去る</sub>] の部分に *beat it* を入れるという足し算・操作を



することによって産出されたものだと考えるのが自然だろう。図7のように図示できる。

図7 [VP<sub>去る</sub> on NP<sub>人間</sub>] を参照した [beat it on NP<sub>人間</sub>] の産出



▷ [reschedule on NP<sub>人間</sub>]

(33) [状況説明] 女性が元恋人との食事中に言うセリフ。

I'm glad we could finally do this. You know, after ninth time you rescheduled on me, I almost gave up on you.

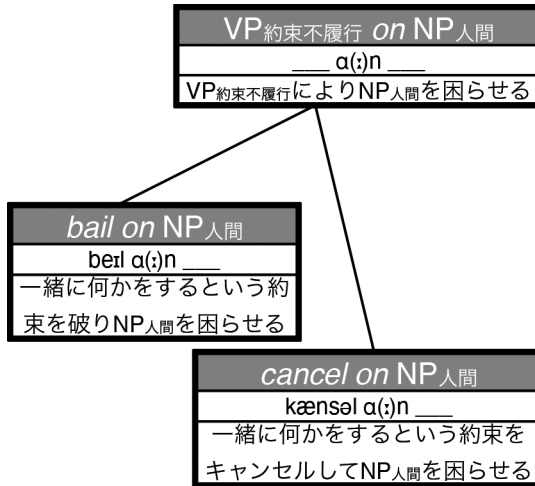
(How I Met Your Mother, Season 4, Episode 16)

とうとう一緒に御飯が食べれることになって嬉しい。だって、9回目の延期になったとき、もう無理かもって諦めかけたから。

[reschedule on NP<sub>人間</sub>] 自体は頻度の低い表現であるため、[reschedule on NP<sub>人間</sub>] という知識が話者の脳内にあるとは考えにくい。それでは、この話し手は(33)を発話するにあたってどのような知識を参照したのか。

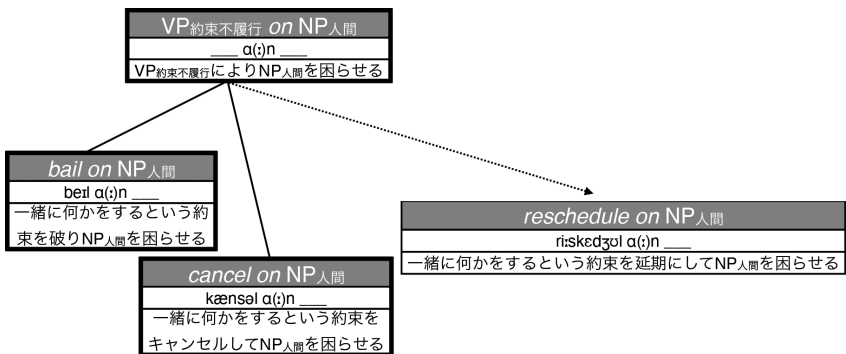
ここで思い出されたいのは、5.1節で見たように、[bail on NP<sub>人間</sub>] や [cancel on NP<sub>人間</sub>] といった表現の知識はおそらく話者の脳内にあるということである。この2つの表現はいずれも未来の行為に関する約束が果たされないことによる迷惑を語るためのものである。この類似性から考えると、話者の脳内では [VP<sub>約束不履行</sub> on NP<sub>人間</sub>] という (ほどほどの) 抽象化が行われている可能性がある (図8)。

図8 ありうる抽象化② [VP 約束不履行 on NP 人間]



(33) の [reschedule on NP 人間] はこの [VP 約束不履行 on NP 人間] という知識を参照し, [VP 約束不履行] の部分に reschedule を入れることによって産出されたものだと考えるのが自然だろう。図9のように図示できる。

図9 [VP 約束不履行 on NP 人間] を参照した [reschedule on NP 人間] の産出



▷ [fall silent on NP 人間]

(34) When she lost her hearing she had had meningitis for 18 months. She had also

had a serious bout of chicken pox. What did she make of it, that morning when the world suddenly fell silent on her? (Google 検索で得た例)

彼女が聴力を失ったのは髄膜炎に1年半苦しめられた後だった。重度の水疱瘡も発症していた。あの朝を彼女はどのように理解したのだろうか。世界が突然無音になってしまったあの朝を。

[*fall silent on* NP<sub>人間</sub>] 自体は頻度の低い表現であり、[*fall silent on* NP<sub>人間</sub>] という知識が話者の脳内にあるとは考えにくい。それでは、この書き手はどのような知識を参照してこの英文を書いたのか。ここで思い出されたいのは [*hang up on* NP<sub>人間</sub>] や [*close / shut the door on* NP<sub>人間</sub>] といった、関わり断絶による迷惑を語るための表現が定着しているということである。ここで言う「関わり」とは、人間から人間へのコミュニケーションと、人間・物体から人間・物体への物理的な作用・働きかけを含めた広い意味での *interaction* を指す。電話を急に切られたり目の前でドアを閉められたりして不快感を感じる人にとっては、もっと「関わり」をもちたいのにそれを絶たれることが不快なのである。そう考えてみると、実は、[VP<sub>去る</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] のパターンも関わり断絶による迷惑が関わっていることに気がつく。妻子をおいて *walk out* する男は、妻子との関わりを断つことによって妻子に辛い思いをさせるのである。こうしたことを踏まえると、話者の頭の中では [VP<sub>関わり断絶</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] という抽象化が行われている可能性がある (図 10)。

聴力を失って、世界が無音になったように感じられることによって恐怖を感じたり生活上の不便が生じたりする場合には、世界からその人への音波の伝播が途絶えることによる迷惑・被害が生じているわけであるから、(34) も関わり断絶による迷惑の事例であると言える<sup>16)</sup>。したがって (34) の書き手が参照した知識は [VP<sub>関わり断絶</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] であり、[*fall silent on* NP<sub>人間</sub>] の産出のプロセスは図 11 のように図示できるものと思われる。

図 10 ありうる抽象化③ [VP 関わりの断絶 on NP 人間]

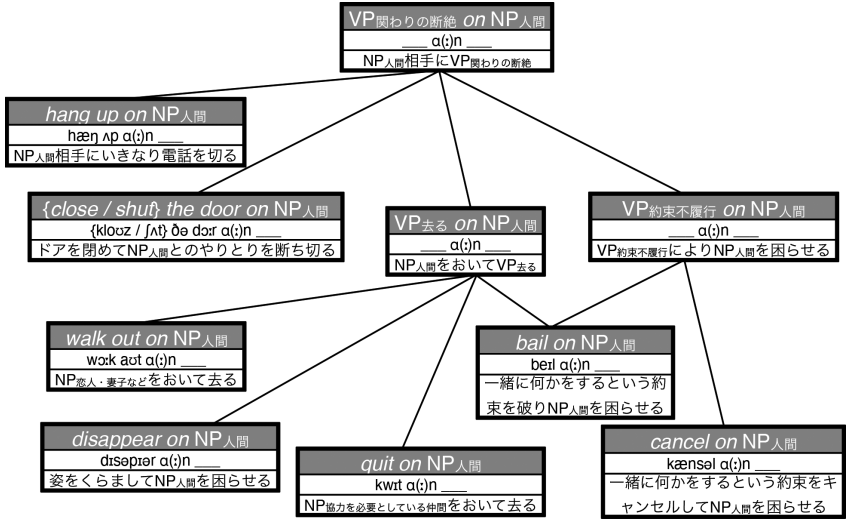
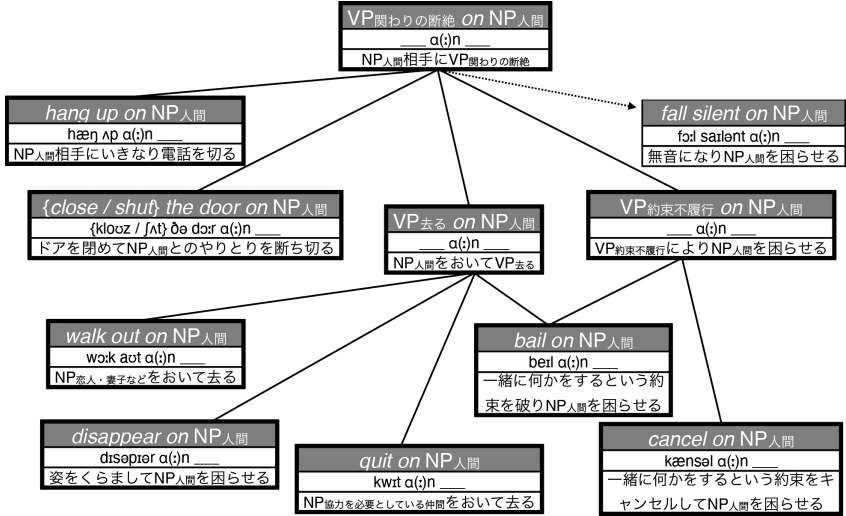


図 11 [VP 関わりの断絶 on NP 人間] を参照した [fall silent on NP 人間] の産出



▷ [eat it all up on NP 人間]

(35) [状況説明] ポップコーンの Amazon レビュー。

This stuff is sinful☹I have to hide it from my husband because he will eat it all up on me if I buy it for myself!

([https://www.amazon.com/Wickedly-Prime-Popcorn-Caramel-Cheddar/product-reviews/B01G61FZI8/ref=cm\\_cr\\_arp\\_d\\_viewopt\\_kywd?pageNumber=1&filterByStar=five\\_star&filterByKeyword=sinful](https://www.amazon.com/Wickedly-Prime-Popcorn-Caramel-Cheddar/product-reviews/B01G61FZI8/ref=cm_cr_arp_d_viewopt_kywd?pageNumber=1&filterByStar=five_star&filterByKeyword=sinful))

これは罪悪感あり☹夫にバレないように隠しておかないと。自分のために買っておいても全部食べられちゃうわ！

[eat it all up on NP 人間] 自体は頻度の低い表現であるため、[eat it all up on NP 人間] という知識が話者の脳内にあるとは考えにくい。それでは、この書き手はどのような知識を参照してこのような英文を書いたのだろうか。筆者は今のところ、(34)と同様、[VP 関わりの断絶 on NP 人間] ではないかと考えている。あつたはずのポップコーンが(夫に食べられて)なくなってしまうことで、この書き手はポップコーンに対して「食べる」という interaction ができなくなる。そのことが辛いのである。このように考えると、一見 (35) と似て見える (13) (以下に (36) として再掲) がどうしても不自然なのかが説明できる。

(36) ?? She ate a cake on him. (= (13))

彼は彼女にケーキを食べられてしまった。

文脈もないうえ、a cake に不定冠詞がついていることにより、ケーキが him にとってどのような存在なのかが全く分からない英文になっている。そのため、[VP 関わりの断絶 on NP 人間] に合致するよう感じられず、(35) に比べて容認度が低くなるのだと考えられる。ただし、6 節で述べるように、迷惑の on を含むほどほどの抽象度の知識には [VP 関わりの断絶 on NP 人間] 以外にも数多くあるため、厳密には、「[VP 関わりの断絶 on NP 人間] に合致するよう感じられず」ではなく、「迷惑の on を含むほどほどの抽象度の知識のどれにも合致せず」が

正しい。

## 6. 結語

本稿の議論をまとめよう。主張の大枠は以下の通りである。英語の前置詞 *on* は迷惑の用法を持つということ、すなわち [VP *on* NP<sub>人間</sub>] で人間に対する迷惑を表現できるということが知られているが、英語母語話者が *on* を使用する際に [VP *on* NP<sub>人間</sub>] ほど抽象度の高い知識を参照しているとは考えにくい。慣習的な *on* の使用の場合には、[*bail on* NP<sub>人間</sub>] や [*cancel on* NP<sub>人間</sub>] といった具体的な表現そのものの知識が参照されていると考えるのが妥当である。創造的な *on* の使用の場合には、それよりもやや抽象度の高い——しかしそれだけで [VP *on* NP<sub>人間</sub>] ほど極端に抽象度が高いわけではない——[VP<sub>去る</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] や [VP<sub>約束不履行</sub> *on* NP<sub>人間</sub>]、[VP<sub>関わりの断絶</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] といった知識が参照されていると考えるのが妥当である。

ただし、本稿では迷惑の *on* と呼びうる用例のうちごく限られた範囲の用例しか扱っていない。[*bail on* NP<sub>人間</sub>] のように具体的な知識や [VP<sub>約束不履行</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] のようにほどほどの抽象度を持った知識が英語母語話者の脳内には他にも数多く存在するはずで、それらをひとつひとつ詳らかにしていくことが必要である。たとえば 4.1 の (10) で挙げられている [*go crazy on* NP<sub>人間</sub>] は高頻度表現であるから、丸ごと記憶され参照される知識だと言うべきだろう。(10) では [*cry on* NP<sub>人間</sub>] が挙げられていたが、これはそこまで高頻度の表現ではないため、たとえば [VP<sub>感情的振る舞い</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] のように [*cry on* NP<sub>人間</sub>] 自体よりも抽象度の高い知識を参照して（そして VP に *cry* を当てはめて）産出されたものである可能性がある。このように [*go crazy on* NP<sub>人間</sub>] や [VP<sub>感情的振る舞い</sub> *on* NP<sub>人間</sub>] といった具体的な表現またはほどほどの抽象度の表現（パターン）を見つけ、その性質を丁寧に記述していくことが、英語母語話者にとっての迷惑の *on* の知識を解明していくということなのである。

## 注

\* 本稿は、2021年6月19日にくろしお出版主催のオンライン講演会「実例とのたわむれかた—英語の前置詞を中心に」(<https://www.9640.jp/news/5788/>)で発表した内容の一部を文章にまとめたものである。講演会が言語研究者だけでなく(中級以上の)英語学習者も対象としていたものであったため、本稿も一般の読者を想定し、言語学の専門用語などは極力少なくしている。なお、本稿の研究は慶應義塾学事振興資金(2021年度)の補助を受けて行われたものである。

- 1) ここでは紙幅の都合により「前から知っている表現を新しい意味で用いる」というタイプの創造性を除いている。
- 2) 萩澤大輝氏にご教示いただいた例。
- 3) 奥脇健太氏にご教示いただいた例。
- 4) 日本語では今鳴っている電話に関して「(あなたへの)電話がありますよ」とは言わないのが興味深い。過去の電話について「(あなたへの)電話がありましたよ」ならば言えるということも踏まえるとさらに興味深い。
- 5) 「{具体的／抽象的}」という言葉の実例を観察してみると、絵やイラストとして描き「やすい／にくい」ものを「{具体的／抽象的}」と呼んだり、単に理解し「やすい／にくい」ものを「{具体的／抽象的}」と呼んだりする用法もあるようである。本稿の「{具体的／抽象的}」はこういった意味で用いているわけではないので注意されたい。
- 6) 本稿における「知識」は、その大部分が、学校で教わったり参考書を読んで勉強したりして得た知識ではなく、無意識のうちに習得した知識であることに注意されたい。ある言語の母語話者が自分の母語について学ぶプロセスは基本的に無意識的なプロセスである。
- 7) この1文から分かるように、本稿における「参照」とは、原則として「色々な文献を参照してレポートを書く」のような意図的行為を指すのではない。ある言語の母語話者が知識を(本稿の意味で)「参照」するプロセスは基本的には無意識のプロセスである。
- 8) ただし、Aとしての認識に付随して、それに言わば必然的に巻き込まれる形で、Xとしての認識が生じるとは言える。
- 9) 認知文法(cognitive grammar)と認知言語学(cognitive linguistics)は(かなり似た名前ではあるが)同じものではない。認知文法は、認知言語学という大きな潮流に属する理論の一つとして位置づけられる(西村1997、篠原1997)。認知言語学の諸派の中には認知文法とは部分的に異なる考え方が見られる場合があるため、初学者は認知文法と認知言語学を混同しないように意識的に注意する必要がある。

- 10) 「根底を貫く」という点が非常に重要である。使用基盤モデルの考え方は認知文法という理論の隅々まで行き渡っているのであり、認知文法を構成する諸概念はすべて使用基盤モデルに照らして理解されるべきものである。したがって、使用基盤モデルの想定と矛盾するようなことを認知文法の名のもとで論じたり、使用基盤モデルを認知文法の道具立ての一つにすぎないものとして考えたりすることは、認知文法に対する誤解の現れとしてみなされるべきである。
- 11) ただし、注8で述べたのと同様に、具体知識を活性化させるのに付随して抽象知識も活性化されているとは言える。たとえば、[VP *with one's eyes closed*] の知識を活性化させたら必然的に [VP *with NP X*] の知識を活性化されることになる。
- 12) 内容・中身を導く where 節。以下の実例は thing についても学べる良い例である。

What seemed, oddly, to be happening was that the closer Paul Sheringham and Miss Hobday got to marrying, the less time they actually spent in each other's company. She [=Jane : Sheringham 家の近所の家で働いている召使い] had heard of that thing where brides and grooms weren't supposed to see each other for a day (or was it just a night?) before their wedding, but this was a sort of expanded version of that practice and had been going on for some time.

(Graham Swift, *Mothering Sunday*)

おかしなことに、結婚に近づけば近づくほど、ポール・シェリンガムとミス・ホブデイが会って過ごす時間は減っていつているようだった。結婚式を前にした新郎と新婦は丸一日（いや、一晩だっただろうか？）会ってはいけないとかいう話を聞いたことはあったが、これはその習わしの拡大版のようなもので、結構な期間にわたって続いていた。

- 13) spoiler alert という名詞句は「ネタバレ注意の警告」の意。ここでは「ネタバレ注意の警告を忘れてるぞ」「ネタバレ注意の警告をちゃんと出してくれよ」の意味で spoiler alert という名詞句だけを発話している。このように名詞句だけでコミュニケーションを達成しようとする頻度が高いのが英語の日常会話の重要な特徴で、たとえば日本語ではチョコを差し出しながら「チョコいる？」の意味で「チョコ？」と言うのは不自然であるが、英語では Chocolate? と言える（言えるどころか一番普通の尋ね方だと言ってよい）。
- 14) 本節で述べたことは、一般化して言えば、創造的な言語使用といえども究極的に抽象的な知識を参照して何でも言っているわけではないということ、人間の言語はせいぜい中間的な創造性しか持たないということである。この問題については Goldberg (2019) およびその書評論文である Hirasawa and Nishimura (2021) を参照されたい。
- 15) 「影の巣窟」というまったく普通でない言い方で訳しているのは、そもそも den



of shadows という英語表現がまったく普通でない言い方であるため。Cheryl は文学少女なので、ここは Amelia Atwater-Rhodes の *Den of Shadows* という小説シリーズから言葉を借用していると考えるのがおそらく妥当だろう。

- 16) この英文は「世界が急に黙り込んでしまった」のように比喩的に解釈することも可能であるが、そう解釈したところで関わり断絶（この解釈の場合にはコミュニケーション断絶）による迷惑が関わっている事例であることに変わりはない。

## 参考文献

- Casenhiser, Devin and Adele E. Goldberg (2005) "Fast Mapping between a Phrasal Form and Meaning," *Developmental Science* 8 (6): 500-508.
- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Goldberg, Adele E. (2019) *Explain me this: Creativity, competition, and the partial productivity of constructions*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- 平沢慎也 (2021a) 「実例から眺める「豊かな文法」の世界 関係代名詞 what——本質さえわかっていたら使いこなせるのか——」『英語教育 (5月号)』70 (2): 60-61. 東京: 大修館書店.
- 平沢慎也 (2021b) 「along the way の意味・用法の記述——on the way との比較から——」『東京大学言語学論集』43.
- 平沢慎也 (近刊) 「見えなくなっていく前置詞, 使えるようになってくる表現—記憶重視の認知文法が教えてくれること—」
- 平沢慎也・野中大輔 (2021) 「実例から眺める「豊かな文法」の世界 「貧相な文法」から「豊かな文法」へ」『英語教育 (4月号)』70 (1): 62-63. 東京: 大修館書店.
- Hirasawa, Shinya and Yoshiki Nishimura (2021) "Native speakers are creative and conservative: What *Explain Me This* reveals about the nature of linguistic knowledge." *English Linguistics* 38 (1): 139-163.
- 小西友七 (1976) 『英語の前置詞』東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in cognitive linguistics* (Current Issues in Linguistic Theory 50), 127-61. Amsterdam: Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1999) A dynamic usage-based model. *Grammar and conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- マケーレブ, ジャン・安田一郎 (1983) 『アメリカ口語辞典』東京: 朝日出版社.
- 西村義樹 (1997) 「認知言語学の潮流」『英語青年』142 (12): 650-654.

- 野中大輔 (2015) 「コーパス言語学」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 89-90. 東京: 三省堂.
- 野中大輔 (2019) 「打撃・接触を表す身体部位所有者上昇構文における前置詞の選択——hitを中心に——」 森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編) 『認知言語学を紡ぐ』 183-201. 東京: くろしお出版.
- 野中大輔 (2020) 「言語学という選択肢, いかがですか?」 (<https://note.com/festinalente1028/n/nd8987e5ea4b5>)
- 野中大輔 (2021) 「「何の変哲もない」の「変哲」って?」 (<https://note.com/dnonaka/n/n22a61b56b5d0#HWXHK>)
- 篠原俊吾 (1997) 「認知意味論と認知文法」 『言語』 26 (10): 52-59.
- Tomasello, Michael (2003) *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge: Harvard University Press.
- 氏家啓吾 (2018) 「ネットワークとしての文法知識——「地図をたよりに」構文の記述を通して——」 『東京大学言語学論集』 40: 251-273.
- 鷺尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」 鷺尾龍一・三原健一 『ヴォイスとアスペクト』 東京: 研究社.
- 綿貫陽・ピーターセン, マーク (2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京: 旺文社.